

新しい時代を象徴するかの如く日本の高度成長を支えた鉄鋼住金の名が消えた

2019.4.9. - 4.11. 朝日新聞朝刊 経済面「発信 日本製鉄上・中・下」

けいざい+

ご意見は keizai@asahi.com

発進 日本製鉄 上

「ニッポン」冠し新興国市場へ

平成に代わる新しい時代へ「令和」が発表された1日、国内製鉄大手の新日鉄住金は「日本製鉄」に社名を変えた。丁度東京駅までの本社で開かれた入社式の壇上に立ったのは、同日付で辞職し昇格した橋本英二（68）名義ともなび新日鉄がスタートしたこの日、橋本は日本製鉄の1期主となる約3000人の新入社員と語りかけた。

「一期主として、一週間は「ニッポン」に貢献して、中期には「ニッポン」を離れ、世界で活躍する」との思いが込められた。新日鉄は「日本製鉄の製鉄会社として、海外事業の統括が主眼となる」という方針を打ち出し、中期には「日本製鉄」の名称を廃止し、海外事業の統括が主眼となる。海外事業の統括が主眼となる。海外事業の統括が主眼となる。



入社式であいさつする日本製鉄新社長の橋本英二＝1日、東京都千代田区

けいざい+

ご意見は keizai@asahi.com

発進 日本製鉄 中

消えた「住金」「対等」どこへ

「改名の時期が早すぎる」「旧住金出身の役員との声もあるが、日本製鉄社長の橋本英二（68）は、新日鉄の統合は「一人の船長もめて進む」と語る。

「対等の精神」を掲げて合併した新日鉄住金の発足時の取組は、新旧両社から10人、住金出身が8人だった。新旧両社から10人、住金出身が8人だった。新旧両社から10人、住金出身が8人だった。



新日鉄住金が発足した日にプレート除幕式を終えて握手する会長の友野正二（右）と社長の友野英二（両者はいづれも当時）。前日まで東横は新日鉄社長、友野は住金社長だった＝2019年10月1日、東京都千代田区

けいざい+

ご意見は keizai@asahi.com

発進 日本製鉄 下

中国勢に危機感 試練の船出

中国の求めに応じて新日鉄製鉄（中国）製鉄が建設に協力した上海宝山製鉄所の高炉が10月8日、火がともった。当時、新日鉄の設備を誇る製鉄所だった。同製鉄所を運営する宝钢集団と武鋼製鉄が2016年に経営統合し、組閣前編成が年々千円を相対増減が誕生、新日鉄住金（旧）を上回る、世界をリードした。

中国では中央政府の主導で環境企業間士の再編が進む。いま中国は世界の船舶の約半分を生産し、組閣前編成の世界トップ10のうち5社を中国勢が占める。日本製鉄社長の橋本英二（68）は高炉スタートについて「今後はますます厳しくなる」と、競争が激しくなると警告を飛ばした。



初出陣の「オートモーティブワールド」で、軽量化した自動車車体を展示した。新日鉄住金社長（当時）の橋本英二（左）が見学に訪れた＝1月18日、東京都江東区

昭和の高度成長から成熟停滞の平成の時代を多くの仲間と共に一番の活動期を歩んだ団塊の世代。後期高齢で迎える「令和」の新しい時代に 想いも人それぞれ。折りしも日本の高度成長を支えた重厚長大 鉄鋼 住金 の名が消えた。

日本経済同友会小林氏の指摘する「平成の30年間 一人負けの日本」の声を背負いながら、我々の時代は終わったのだと一抹の寂しさを覚える。

現役世代であり続けたいとの願いを封印して若者に任し、小林氏が指摘する総括に耳を傾け、各分野で新しい道を若者に託すことが日本復活の道ではないかと。

2019.4.10. Mutsu Nakanishi

「平成の30年間、日本は敗北の時代だった 敗北日本、生き残れるか」



1月30日朝日新聞朝刊に掲載された財界の重鎮小林喜光氏のインタビュー記事にびっくり。くぎ付けになった。小林喜光氏の熱い思いの発言に釘付けになった。日本の現状に日本を牽引する財界トップリーダーの一人一人とは思えぬ厳しい発言と指摘が並ぶ。すべてがすべて、今後の道に必要とは思いませんが、日本の現状や指摘・そして方向性には承服。ビックリする明快さ。日本の社会の現状がおかしいと思いつつも、なかなか口にならなかったことが、ストレートに記事にされている。それも、現状肯定一辺倒と思っていた財界人の口から……。

私だけではないんだ。 思いは同じで、もやもやしていた思いがすっきり整理できて、気持ちがいい。また、ちょっと視点がいつも重厚長大・製造業重視に偏る私の頭もガソンと……。

出口すら見えぬ課題山積の日本。そして老害が蔓延する日本を端的に指摘するコメント。

さあ 日本はどう動いてゆくのだろうか…

ご承知の方も多いと思いますが、参考になればとできるだけ、記事を忠実に整理転載しました。いつも勝手なことをぶつぶつ言う私にとっても反省と良い刺激となりました。

うはやすし。頭は回らぬが 好奇心・突き進む力もまだある。大勢に飲み込まれぬよう がんばらねば……と。

「平成の30年間、日本は敗北の時代だった 敗北日本、生き残れるか」

◆ インタビュー記事のトップに記載された 小林喜光氏のプロフィール

1946年生まれ 相関理化学専攻 イスラエル留学などを経て

74年に、三菱化成工業(現三菱化学)に。2015年から経済同友会代表幹事

1946年、新進の企業人83人がつくった経済同友会。経済再建を誓った設立趣意書には、「全く新たなる天地を開拓しなければならぬ」「同志 相引いて互に鞭うち脳漿をしぼって」と熱い言葉が並ぶ。

以来70年余。同友会を率いる小林喜光さんの頭を離れないのは「日本が2度目の敗北に直面している」との危機感だという。技術は米中が席卷。激変に立ち遅れ、挫折の自覚ない。

◆ 小林喜光氏 インタビュー 記事 新聞掲載要旨 水色はインタビューの質問 ◆

2019.1.30. 朝日新聞掲載 小林喜光氏インタビュー 聞き手 編集委員・駒野剛 より

● 平成の30年間、日本は敗北の時代だった 事実を正確に受け止めなければ 再起はできません。

今では、グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾンという『GAFA』と、アリババ、テンセントなど米中のネット系が上位を占め、モノづくりの企業はほとんどない。日本はトヨタ自動車が四十数位で、そこまで差がついた。

企業の盛衰が反映する国のGDP(国内総生産)でも伸び悩む日本に対し、米中は倍々ゲームで増やしていった。テクノロジーはさらに悲惨です。

かつて『ジャパン・アズ・ナンバーワン』などといい気になっているうちに、半導体、太陽電池、光ディスク、リチウムイオンバッテリーなど、最初は日本が手がけて高いシェアをとったものもいつの間にか中国や台湾、韓国などに席卷されている。もはや日本を引っ張る技術がない状態です

● 事実を事実として受け止めないから

「GAFAみたいな世界もすぐ追いつける」とのんきな気分で見られるんでしょう。

そもそも失われた20年とか、デフレマインドの克服とかいうこと自体が本末転倒です。

安倍晋三政権、アベノミクスが唱えられ 「財政出動、金融の異次元緩和を進めるから、それで成長せえ」といわれました。しかし本来は時間を稼ぐため、あるいは円高を克服するために取られた手段で、それ自体が成長の戦略だったわけではないのです。この6年間の時間稼ぎのうちに、なにか独創的な技術や産業を生み出すことが目的だったのに顕著な結果が出ていない。ここに本質的な問題があります。

内閣府の2018年6月の調査でも74・7%の国民が今に満足していると答えています。

18~29歳では83・2%ですよ。

心地よい、ゆでガエル状態なんでしょう。日本全体は挫折状態にあるのに、挫折と感しない。

この辺でいいやと思っているうちに 世界は激変して 米中などの後塵を拝しているのに、自覚もできない。

カエルはいずれ煮え上がるでしょう

● 国家の未来図が描かれないままの政治が与野党含めて続いてしまったためです。

今さえよければ、自分さえよければ、という本音の中で、国民も政治家も生きてきた。

周りが敵ばかりのイスラエルや、覇権を維持するためには科学を前に進めなくてはならない米国などと違い、皆で楽しく生きていきましょうという空気が取り巻いて敗北を自覚しない。

運動会で「みんな一緒にテープを切りましょう」と競争自体を忌み嫌った時期もあった国だから無理もない」

● 敗北が見える、自覚できる事態になると・・・

地政学では三つの選択肢がある。今は米国依存ですが、さらに従属を深めた米国の別種の州として生きていく。これを断ち切れれば、うっかりすると中国の一つの市、北京や上海になる形もあり得るでしょう。

どちらも嫌だ。日本は日本だと独立を守り、米中の中で中立を保つことも可能性としてはある

経済、技術を通じた地経学的な見地が死活的に重要です。現在は歴史的な革命期にあると皆が認識すべきです。

5GもAIもサイバーセキュリティーも日本は本当に遅れてしまい、基幹的な技術を欧米や中国から手に入れなければ産業、社会が立ちゆかなくなる。外国政府や企業の意向を無視しては国家全体が成り立たなくなる。リーディングインダストリー（成長を引っ張る産業）を自国の技術で育てることができず、他国の2次下請け、3次下請けとして食いつなく国になってしまう

● **抜け出すのも至難 息継ぎのために国債が乱発された結果、財政に余力はなく、持続可能性が疑問の現状**

GDPを増やそうとして逆に国内の総負債を増やしたんです。

6年間で約60兆円のGDPが増えたといいますが、国と地方の借金は175兆円も拡大しました。

これで次の世代に引き継いでいけるでしょうか。

一方で5Gや半導体、量子コンピューターなど次世代が利用する技術の研究開発費は欧米や中国に出遅れている。

● **アベノミクスに小林さんを含め、財界も手をさしのべた。結果的に時間稼ぎにか担した責任は軽くない ……。**

非常に問われている。矜持（きょうじ）を持つ財界人が少なくなりました

経営者として、あるいは社会的公器のリーダーとして、社会に対して強く関わって変革していこうという意志を持った人の絶対数が減ったんです。

● **かつて土光敏夫さんが臨時行政調査会を率いて行政改革を進めた頃、財界には高い権威がありました。**

でも ネット社会のいまは、財界トップと言っても、持っている情報が一般の社員と比べて特段に優れているわけでもないから、社会的地位も特段に高いわけでもない。そうした状況で、官邸1強体制の中、経済財政諮問会議や未来投資会議など政府の意思決定過程に組み込まれてしまえば、できることもたかがしれている

● **変えていくためには……………**

まずは財界トップに権威のない時代だと自覚する。だからこそ財界人だけで群れて固まらず、

学界や知識人、若い人たちも含めた幅広い団体、いわば知的NPOを作って意見を交わし、社会に問いかけ、政治に注文する。そういう柔軟な形でないと世の中は動かなくなっている。

まず知的NPOとして活動する場として、今度の大阪万博などは、よい機会になると思います。

お金集めなどは二の次です。世界に向けて何を考え、何を訴えるのか、それが本質です

● **日本の衰退が心配な半面、世界は一国主義や分断が広がっています**

一国主義を主張する政治家は選ばれた存在に過ぎず、選んでいるのは国民です。悪いのは国民です。

各国で国民が劣化したんです。偽りと真実を見極めることが民主主義の原点なのに、それができずに独裁者を生む。プーチン氏や習近平氏であり、西側でもそういう連中ばかりになってきた。

劣化は老いから始まったと思います。老いて勉強しない。考えない。新しいものに果敢に挑み、切り開くエネルギーも 枯渇してきました

● **先進国は老いたのですか……………。**

文明は老いるものです。ローマしかり、大英帝国しかり。新しい血と混ぜることを嫌えば衰退に向かう。

それが世界史です。トランプ氏が壁造りに躍起になっていますが、外国からいろんな人がやってきて 活性化してきたというエネルギーを馬鹿にしてはいけません。日本は「弱きを助け、強きをくじく」といった大和心は残しつつ、進取の気性を培わないと、挫折したまま滅んでしまう。単なる労働力として外国人を入れるのではなく、勉強する、考える日本人を増やす触媒の役割を担ってもらうべきです。

● **社会にはストレスが生まれませんか……………。**

だからいいんです。無用な対立はいけません。異文化と接することで日本本来の文化も磨かれる。

陳腐化したものは淘汰（とうた）される。そうした新陳代謝を怠ったのが、残念ながら平成時代の一つの性格です。異文化とワイワイガヤガヤやって実力がつくのです

2019.1.30. 朝日新聞掲載 小林喜光氏インタビュー 聞き手 編集委員・駒野剛 より
できるだけ記事に忠実に転記整理させていただきました

2019.2.5. by Mutsu Nakanishi from Kobe

◆ 2019.1.30. 朝日新聞掲載 小林喜光氏インタビュー記事紙面 file

<http://www.infokkna.com/ironroad/2019htm/2019mutsu/小林喜光氏記事.jpg>